足助の聞き書き

朗読集

第五集　ダイジェスト版

足助の聞き書き　朗読集　第五集　ダイジェスト版

朗読　葵　真弓（ラジオ・ラブィート　パーソナリティ）
録音・編集　小笠原禎志（ラジオ・ラブィート　ディレクター）

ディスク1

炭焼きの名人 ～好きな仕事なら成功するわ～　筒井（つつい）　敏夫（としお）さん（山谷町）
何をやっとっても嫌と思ったことないね　磯谷（いそがい）　康夫（やすお）さん（東大島町）
八十年を振り返って　松井（まつい）　りつ子さん（足助町）
里山に生きて　安藤（あんどう）　甲寿（かずひさ）さん（上切山町）
写真店の商売を続けて来られたことに感謝して　宇井（うい）　司郎（しろう）さん（足助町）

ディスク2

愛ちゃんの意欲とまごころ　河合（かわい）　愛子（あいこ）さん（富岡町）
上八木（うばやぎ）を語り継ぐ　小澤（おざわ）　晃（ひかる）さん（上八木町）
木切りと木出しの職人にならあ　河合（かわい）　三一（みついち）さん（白倉町）
今のところ九十七歳　兵隊と教師とお坊さんを生きて　本多（ほんだ）　秀山（しゅうざん）さん（月原町）

はじめに

『足助の聞き書き朗読集～第五集　ダイジェスト版』が完成し、九作品のダイジェスト朗読をお届けすることができました。

朗読集作成のきっかけは、ラジオ・ラブィート（エフエムとよた）の番組内で、パーソナリティの葵真弓さんが第九集作品の一部を朗読してくださったことに始まります。その朗読を聞いた事務局全員がとても素敵だと感銘をうけ、聞き書き作品の新たな魅力を感じました。

コロナ禍では、お年寄りのお宅を訪ねてじっくりとお話を聞く、聞き書き活動は難しく、新たな作品づくりへの活動ができない状況でした。そんなときに、葵さんの素敵な朗読を聞き、作品を音声化したいと、わくわく事業へ応募し、地域会議のみなさまからも応援していただくことができました。

音声化の実現は、エフエムとよた株式会社様のご理解とご協力のおかげです。この聞き書きの活動を評価してくださり、地域活動に貢献したい想いで快く引き受けてくださいました。こころより感謝申し上げます。朗読してくださった葵真弓さんは、話し言葉の作品なので、イントネーションや方言の言い方などを事務局と丁寧に読み合わせて確認し、作品のイメージを大事にして取り組んでくださいました。小笠原禎志さんは、収録、確認・修正、再収録と、膨大な作業量の編集をしてくださいました。関係者のみなさま、本当にありがとうございました。

そして、この朗読集が、目の不自由な方や、文字を読むのが難しい方、そしてお子さんも、「足助の聞き書き」を知っていただく機会になり、聞き書き活動の広がりにつながっていくことを願います。もちろん、これまで読んでくださった方にも聞いていただき、新たな魅力を感じていただきたいです。

あすけ聞き書き隊

炭焼きの名人 ～好きな仕事なら成功するわ～

筒井（つつい） 敏夫（としお）さん （山谷町） 昭和三年二月八日生まれ（八十七歳）

炭焼きを手伝う幼少時代

生まれも育ちも足助だ。ここは山谷（やまがい）町っちゅうとこだけど、その中でも浅谷（あざかい）っちゅう部落で昔は十二軒くらいあったけど、今は過疎で三軒だな。

今、一緒に住んでるのは長男夫婦と俺と奥さんの四人家族だ。子どもは三人おって、長男は建設会社で監督やっとるわな。もう定年過ぎただけど使ってもらっとるもんで。次男坊は明智にいるし、娘は豊田の町の方におるけどさ。

奥さんとはお見合い結婚だ。丸っきり押し付けでも無かったかも知れんけどな。親戚から貰ったもんで、いとこ同士だ。昔は要するに仕事に使いたいもんで、早よ嫁を貰ったっちゅう一面もあるだよ。ほれだもんで、俺が二十二歳で嫁さん来たときは二十歳だわ。

子どもの時分はお祖父さんとお祖母さんと両親と暮らしてた。兄弟は皆死んじゃって、一緒に生活したなんて覚えないもんな。一人っ子みたいなもんだ。

家は百姓やって、山仕事で生活しとっただわな。昔の仕事ちゅうものは山に住んどる者は炭焼きと百姓やって、あとは山に関する仕事で生活しとっただわな。

あの時分はどんな山でも全部、雑木林だったもんな。炭焼きも黒炭と白炭があんだけど、その当時はこの辺はほとんど白炭焼いとったわな。白炭ってやつは今で言う備長炭だ。焼けた炭を外に出えて、灰を掛けて火を消やすだわ。黒炭は窯の中で消やいちゃうわけ。よう焼けた炭は、空気に当てると炭そのものが締まるだ。ほれだもんで、白炭は硬いんだ。それをひと窯で四俵か五俵出るくらいの小さな窯で毎日焼いたわけだ。

それで、家族皆で山に行って仕事するだったわな。お祖父さんは木を切る。お祖母さんとお袋はその木を窯へ寄せる。親父は出来た炭を表装したりして、分担して仕事をやったもんだわな。ほれで、売らなあかんもんで、十六時か十七時ぐらいになると町まで歩いて炭を背負ってくだわな。大人は三俵、女は二俵、子どもは一俵背負っちゃあ町まで行くだわ。三俵ったあ、四十五キログラムを背負ってくってことだもんで、一日仕事をしてほれから行くだもんで。そら、えらい仕事だったぞ。

変化する炭の需要と仕事の移り変わり

猿投農林を出たもんで昭和二十四年から三年間、賀茂村役場で農業指導員をやっとったことがあるだ。百姓のことを皆へ教えていくわけだわな。

指導員を辞めたあとは炭焼きをやったわな。その当時は山の仕事はかなり収入があったもんでな。木の伐採や下刈りも良い日当だった。炭焼きばっかじゃなくて伐採とかもやってみたけど、収入面で言うと炭焼きの方が良いもんで炭焼きに戻っただ。

ほれで炭焼きやるなら、その時分が戦時中の物資の不足したときで、どんな炭でも良かっただな。ちったあ灰が入ろうが、俵一杯に積めて売っちゃう時代だった。それがだんだん炭として価値のある品質を重視される時代になってきた。

やっぱり良い炭焼かないかんちゅうことでその当時、大山鐘一ちゅう人がえらい熱心で炭焼きの研究して全国の優秀な産地へ行っちゃあ研修してきて、この地方で指導しておった人があるもんで。俺も大山先生に一つ教えてもらおうちゅうことで、その人を頼って炭の研究をしただな。

ほれで通用する炭が焼けるようなったもんで、炭焼きで生活しようと思うとった矢先、昭和三十五年にちょっと不幸があってな。部落の子ども達の火遊びから火事になって、俺んとうの家も山も焼けちゃったもんで。そこで新しい住まいを建てるだとかで二年ばっか炭焼きを中断しちゃったわけだけど、炭焼きに戻ろうかなあと思う時分には、燃料も石油やガスに押されて木炭の需要が減ってきたもんで。とても炭焼くだけでは生活できん状態になったもんだ。

もともと炭焼きと農業で生活しようと思うとったけど、炭焼きが斜陽産業になって上手くいかんくなったもんで。農業の方はまだ経済的には生活出来ていくほどはあったもんで、一時は猿投の農協へ来て、二町歩ぐらいの田んぼ借りて百姓やっとったよ。ほれも一、二年は良かったけど、米の単価が下がってくると採算が合わんだら。ほれだもんで、今度は自分で作るよりか、農協のオペレーターになって稲刈りや田植えをやってやったわな。その頃、鍋田干拓（なべだかんたく）（弥富市）までコンバインを見に行ったよ。イセキとヤンマーと二台あったけど、ヤンマーの方が操作的にちょっと合わんかったんだ。ほれで、イセキのコンバイン買っただけど、猿投農協で始めて俺がコンバインを買っただ。皆が見に来たでや。

ところが、農協のオペレーターが忙しいのは百姓の時期だけで年間通しての仕事じゃないもんで、その頃は土建業がなかなか良い時代だったもんで、農協辞めて土建業始めただな。ただ、これもだんだんと斜陽産業になって廃業しちゃった。

土建業やりながらでも、炭は焼いとったもんで。一年に二窯か三窯ぐらいだけど、ずっと続けてはおった。今の窯を作ったのは三十年ぐらい前になるな。そりゃあ途中で何べんも直したり、改良しちゃおるけどな。土建業で林道やらやっておると支障木が出るんで、その木を捨てちゃうのはもったいないってことで、そういう廃材を持ってきては炭焼き始めただ。

より良く炭を作る技術の探求

窯は方々の土地の窯の特徴や長所を取り入れて、改良してあるわけだわな。全国どこ行っても、その地方ごとに何とか式っちゅう窯があるわけだ。

俺が作った窯は昔の愛知式を自分なりに改良して作ったわけだわな。愛知県は千葉の清澄式の系統が導入されとるわけだわ。大正年間に愛知県が東京の大学へ炭窯を作りたいっちゅうことで依頼したら、東京の大学は千葉県の清澄に実習窯を作っとって、清澄の窯の系統が愛知県には普及されとるだわな。戦後、炭焼きの先生と一緒に清澄へ十日ぐらい研修してきただ。

岩手の窯も良いけど、炭材が短いもんで立ちが低くて作業がどえらいつらいだ。それは炭質の問題で、炭は上の方と下の方で炭質の差が大きいもんで炭材は短い方が良いわけ。そういうことで岩手は短い炭材を使っとるわけ。ただ、短い炭材を作るとひと窯焼いても出る数量が少ないもんで、窯を大きくせにゃならんちゅうことになる。大きな窯を作ると、土ばっかでは天井が持たんもんで吊り鉄板でやるだね。ほうすると、炭焼くのに窯の中の温度が上がってくと、鉄板が真っ赤になって吊ってある金も焼けて伸びてくるわけだ。ほうすると天井が切れて落ちちゃうもんだから、あんまり温度が上げれんもんで、出来た炭の炭質が悪いだ。悪い炭っちゅうのは炭が柔らかい。要するに火持ちが悪いちゅうことだな。

ほれで今度はコンクリートでやってみた。全国でもコンクリート天井の炭窯なんて、どこ行っても無いと思うよ。書物で見る限りはまだ紹介されたことは無い。全国でも俺のこの窯しかない。コンクリートにしたのは足助屋敷を辞めてからで四、五年前だな。昔はコンクリートが無かったもんで、赤土でやっただけだで。作るときは皆が「コンクリは火に弱いであかん」って冷やかしだ。そら、柔らかいことは柔らかいけど赤土よりははっきり言って丈夫。ただ、これももうちょっと研究してやれば良い。五年経つけど、ヒビが入ってきた。土囲（ど い）（窯内の胴囲）はやっぱりレンガが一番良いね。コンクリートの欠点は熱にはある程度良いが、煙に含まれる酸に弱いだね。天井の方はしっかりしとるけど、土囲はボロボロと削れていっちゃう。土囲をレンガでやって天井をコンクリートで作れば、永久かは分からんが十年や二十年は使えると思うね。

改良の末に行き着いたコンクリート天井の炭窯

窯の操作は煙の色と匂いだけで、大体操作してくもんな。昔は温度計に頼って煙の出るとこで温度を測っただ。八十度から八十二度になれば着火しとるだけど、ちょっと火が点き過ぎとるちゅうことがこの頃分かったかな。もうちょっと温度低くても、炭化してくちゅうことが分かって温度計は使わんくなった。

足助屋敷は七十六歳で入って、七年おった。大山鐘一さんが初代の炭焼き担当で、その後は息子の大山英利さんが十七、八年おったわな。俺が「暇になったで、屋敷で炭焼き小屋の仕事無いけや？」って言ったら、大山（英利）さんが「俺もずいぶんやったで辞めるで、お前あとやりい」って。ほれで、すんなり入っただ。

好きで続けてきたこの仕事

まあこの仕事も自分が好きなもんでやっとるだ。仕事っちゅもんは何でもほうじゃないかい。自分が好きでなけにゃ成功出来んよ。嫌な仕事はやっぱ身が入らんであかんな。苦労あっても何でも、仕事は自分が好きにならにゃあかん。好きな仕事なら成功するわ。

炭焼きは面白いもんでなあ、いつも同じようにやっとっても違いがあるだな。そこに面白みがあるだら。窯をいつもと同じように立てて、同じように火を点けて、炭化時間も八十時間か九十時間ぐらいで終わるだら。ほれで炭を出えてみると、焼け具合や出る俵数に違いがある。同じようにやっとるつもりだが、何か違っとることをやっとるちゅうことだわな。それを見つけるために研究しとるよ。まあやっとこ今年になってから、俺が満足できる炭が安定して焼けるようになったな。

【聞き手・澤目純一（瀬戸市）】

何をやっとっても嫌と思ったことないね

磯谷（いそがい）　康夫（やすお）さん（東大島町）　昭和十三年一月二十三日生まれ（七十七歳）

おもちゃを分解することと本が好きだった子ども時代

祖父母と両親、姉二人の六人家族の長男として生まれました。その後、妹二人が生まれたもんで、九人の大家族だったね。でも、その当時は、そんくらいの人数はごく当たり前だった。生まれも育ちも東大島町。中学卒業してから一年間だけ農業研修しとった時期を除けば、一歩も東大島を出たことないね。

子どもの頃は、おもちゃを分解するのが好きだったね。おもちゃを買ってもらうでしょう。そうすると、とにかく中味がどうなっとるかって見たくて、そんで、分解しちゃうんです。でも子どもの時分だったんで組立てはようできんで壊れたまんま。だから僕はおもちゃをあまり買ってもらえなんだ（笑）。

地元でがんばりゃいい

子どもの頃、勉強せよって、言われたこと一切ないの。勉強して知恵をつけると、外に出ていっちゃって、地元には帰ってこんくなるからちゅうのが母親の考え方だったわけ。だから、何やっとっても、勉強やれとだけは言われなんだね。

僕は、五人兄弟姉妹でたった一人の男だったんで、母親にすれば、なおさら、外に出て行ってもらいたくなかったんで、勉強せよって、一切言われんかった。

親がそんな教育方針だったこともあってか、父親が東大島で大工と農業をやってたんで、そのあと継いでやっていきたいという気持ちはありよったね。子どもん頃からずっとね。大工やりながら農業というのは、もう自分の中でも、うちの中でも、全部規定路線だったからね。なんの抵抗もなかったですね。そんで、進路を考えにゃいかんというようになった中学三年生の時には、地元に残って大工になるって決めとった。

そんでも、僕はこの生まれ育った場所で地に足つけて暮らそうと思っとったね。「地元でがんばりゃいい。」ちゅう考えが僕の「原点」だね。

口より先に物が飛んでくる―仕事は目で覚えろ

昔の大工というのはね、教えられて育てちゅうんではなく、見とって覚えろちゅうことだったです。親方でもある父親は、自分の息子だからって大工仕事を手取り足取り教えてくれたことは一切なかったね。寸法のとり方やその計算方法も、墨打ちの仕方（工事中に必要な線や位置などを床や壁などに表示する作業）も、柱の組み方も、なんにしても目で見て覚えろだったんです。だもんで、二十二～三歳ぐらいまでは父親と思ったことはなかったね。そん当時、年上の人と同い年ん子が住み込みの修行でおったけんど、僕が大工の修行に入ってからは、この二人の兄弟弟子と同じ部屋で過ごしとった。息子だから言って特別扱いや家族としての扱いはまったくなかったです。親しい言葉での会話なんて、そんなんやったこと一つもなかったもんね。

うちの父親はね、頭も確かに良かったけど、足助町に鳴り響いておるぐらいきつい人で、口より先に物が飛んでくる人で。金槌まではさすがに飛んでこなかったけんど、差し金ちゅうて材木などの長さを測る薄い金属製の工具で、「ピシャッ」って叩かれる。

柱や梁（はり）なんかの材を組み立てる段階になると、鴨居などの材を両手で持たされる作業をよくやらされました。その間、親方は、位置を決めて墨で印を打つんだけんど、僕は背が低いもんで、それでも精一杯に背を伸ばして持っとるんだけんど、次第にえらあなっていごくじゃん。そうすると、「動くな。」って、怒鳴られる。こんな重いもんを支えさせたりするえらい作業をいろいろさせとったんは、今思えば、間近で作業の手本を見せる機会を弟子たちに与えとったんかも知れんね。親方は、一言もそんなことを口にしたことはなかったけんど、少なくても半分位はそんな気持ちもあったんではないかと。

「なぜ、あれがこうできるんだ。」って、なぜちゅうことをいつも、親方の仕事ぶりを見て、考えながら修業しとったね。

大工仕事が本当に大好きだから―お客さんに喜んでもらやいい

朝はだいたい夜が明けるころから起きて、日が暮れるまで仕事しとったですね。昔はね、日のあたっとるときは仕事やる時間だもんね。そんで修業時代はね、みんなで夕食とって、食事の後は、夜九時ぐらいまで建具を作っとったです。夕食後は、建具職人になったわけ。土日もなく、毎日毎日働いていたね。正月三日間は休みよったけど、盆は休んだことなかったもんね。

「まあ任せたで、自分でやれっ。」って、親方である父親から言われたんが、二十五歳ぐらいになったときだったかね。

大工の仕事は、いろいろあって、水抜きや整地ちゅう土木工事や基礎工事も全部やっとったです。だから、ユンボちゅう穴を掘ったり、土を運んだりする建設機械も持っとるよ。ガス工事以外は、水道工事や板金っていう家の外周り（外壁等）の仕事など、一から十まですべてを自分でやっとたね。鉄板を曲げたり、切ったりする板金の道具もすべて揃っとったね。設計図面も

自分で描いとったです。一番多いときは、一軒の家で五十枚も図面を引いたこともあるね。全部を自分でやるもんで道具代も馬鹿にならんで、金儲けは下手くそなんだね。自分の日当分がもらえりゃいいちゅう感覚で働いているもんで、諸経費とか手数料なんちゅうのももらったことないです。だもんで、いつまで経っても貧乏な暮らし。家内や家族には苦労させとったわね。でも、下手なもん（者）にやってもらうよりは、全部自分でやった方がいい。「とにかくお客さんに喜んでもらやいい。」ちゅう考え方が原点なんで、お客と自分が納得できるようすべて自分でやっとった。儲けは考えずに。

いい家づくりは一～二年はかかるね

今まで、細かい物件も含めりゃたくさんの家を建ててきたね。そんでも、「本屋普請（ほんやぶしん）」という本屋（母屋）を造ったのは、二十軒ぐらいあるかな。古いもんだと、もう築五十五年ぐらいにはなるけんど、造った本屋は全部現役のままだね。

ハウスメーカーが造る今の家だと数か月で建っちゃうけど、一軒の家を造るんには普通は一～二年はかかるね。「家ちゅうのはやっとかかって（時間をかけて）造らないと駄目なんだよ。」って、昔の家はそうだったんですよ。一気に続けて造っていくとその後、材が伸縮したり、ゆがんだりする。だもんで、大きな材木を使うほど、材木が乾燥して落ち着くまで長い時間置いておく必要があるわけ。屋根の目方もかかるもんで、乾きながら（梁（はり）が）下がることもある。木は生きているから、時間がかかって当たり前。木の落ち着き具合を見ながらじっくりと作業してかんと、いい家はできんね。

わずか一か月で家づくりを

大工仕事やっとって「ああ、えらかった。」っていうことはなかったね。ただね、昭和四十七年七月にすごい集中豪雨があって、小原村あたりではたくさんの人が死んだんです。そん時に、「潰れた家を建ててくれ。」ちゅうて頼まれたんです。かなり大きな家なんだったね。

そしたら、お施主さんから、「方位方角を見てもらったら、今から三十日以内に建てんと二年間、建てちゃいかん。」っていわれて。もう、工事を始められちゃったから、それを聞いた日から三十日間、家が建つまでほとんど一日中働いたね。やるとなったら、三十日ちゅう期限までに間に合わせにゃいかんもんで。そうかといって、大きな災害だったもんで、頼んで連れて来る職人さんもああへん。仕方ないもんで、一人でやるしかない。まあ、そん時分は、父親も生きておって、頼むと少しは手伝ってくれたんだけど、「こんな時間がない仕事させられたのは、俺の生涯で初めてだ。」って父親がゆっとったぐらいだったね。

やるだけのことはやらにゃならんもんで、だったら、時間全部使わにゃしょうがない。身体がもたんくなると、柱材の上でころんと寝て。一か月間布団の上に寝ずに、柱材の上で仮眠をとりよったです。三十歳前半の働き盛りだったからね。やる気になっとったら、そう寝んどったって働けたね。背は低かったけんど、握力が七十八キログラムもあって、指二本で六十キログラムの材を持つことができよった。

そんでまあ、何とか三十日間で棟（むね）上げまでできてね。一応、棟木（むなぎ）を上げりゃ家を建てたっていうことになる。建前が済んだっていうことになるわけ。何とか間に合ったわ。そんでも、「仕事が辛い。」と思ったり、「大工仕事嫌だなあ。」と思ったことは一切ないもんね。

則定小学校の子どもたちとの稲作体験―「一粒万倍」を伝えたくて

十年ほど前から則定小学校の先生に頼まれて、則定こども園の横んところの田んぼで子どもたちと稲作りをやるようになりました。複式学級の時もあったもんで、そん時は四年生と五年生、今は、単式に戻ったもんで四年生を主体でやっとります。先生から「田植えと稲刈りをやってくれ。」と言われたもんで、「嫌だ。」と言ったげな。「どうせやるならね、種蒔きから、お米にするまでやるならお手伝いするけど。」って、返事をしたね。楽なとこばっかやってもいかんもんね。

「一粒万倍（いちりゅうまんばい）」っていう言葉があるんですけど、そんことを子どもたちに体験しながら知ってほしいんだね。「一粒の種を蒔けば、それが実って何倍もの粒になる。」っていう意味だけど、こん言葉の中には、「お米一粒とるのにどんだけ手間隙かかるか。」っていう教えや「わずかなものでも無駄にしてはいけない。」という戒めの意味もある。実際、手間暇をかければ、一粒のお米（種もみ）から、三千粒位ものお米がとれる。子どもたちにそう話すと「本当にそんなに一杯になるの。」って言います。そんなもんで、「反論があるなら、一回全部自分でやってみるとわかるよ。」って、実際に稲作りをやって、数えてもらうわけ。昔は、「ご飯を残すと罰が当たる。」ってよう言われたけど、今では、大人もあまりそんことを言わんくなったもんで、教えにゃわからん。稲作りを通じて子どもたちに知ってもらえりゃ嬉しいねぇ。

則定小学校の児童たちとの稲作体験

【聞き手・加藤栄司（日進市）】

八十年を振り返って

松井（まつい） りつ子さん（足助町） 大正十五年二月十一日生まれ（八十九歳）

足助で過ごした幼少期

大正十五年に戸中（とちゅう）で産まれてね。おじいさんは産まれた時にもう亡くなってて、おばあさんは私が産まれた時にはもう足助へでちゃってたから、父と母と子どもだけで住んでたね。妹は小さい時に親戚へやっちゃったから兄弟は私と姉と兄二人。ちょこっとばか百姓やってたけど貧乏でね、父は炭焼きをやってお金をとってたよ。足助では炭買ってくれる問屋さんが何軒かあってね。炭が焼けて俵に詰めれると夜に背負子（しょいこ）で背負って問屋さんへ行って売って来てね。そうやって親達は夜まで働いたんだよね。母親は機織りしよったから、子供たちの物は母が織った物を着てたね。大人も冬になると綿入れの半纏（はんてん）を作って、山へ行くにそればーっか着て。

私ら子供は山から水を汲んで提げて来るのが仕事だったよ。ほいでも夏んなると山から来る水が無くなっちゃうもんで、五十メートル位下の発電所から水を汲み上げた覚えがあるよ。平らじゃないもんで提げあげるのに大変だったね。そんなふうだで風呂も毎日なんて入れんかったしね。

看護師の道へ

冷田の学校を卒業した時に看護婦になりたかったんだけどね、汚い仕事だとか何とか言って父親が許してくれなかったの。だから十六歳の時に静岡の中電で仕事してた二番目の兄のところへ、兄嫁がお産するちゅう時にしばらく手伝いに行ってね。戸中の家には兄嫁さんがおって私は小姑だもんで、母が気を遣って一緒におらんほうがいいかなって言ってくれて。今度は東京で飴屋をやってみえた母の姉さんの所へ手伝いに行くことになったの。そいで昭和十八年までいたのかな。でもだんだん戦争が激しくなってきてね。次兄が第二国民兵というので兵隊にとられてしまったから私は足助へ帰って来たの。そいで足助の板慶（いたけい）さん（呉服店）のおじいさんにちょっと手伝ってくれんかって言われて半年位いたかな。その頃ちょっと新聞見たらね、当時名古屋に伝染病ばっかの市立病院があってね、城東（じょうとう）病院ていう。そこの看護師募集をしとって。もう父親は亡くなってたから、それでそこへ応募して看護師になることにしたの。そうして半年くらいしたらね、今度は陸軍看護婦募集っちゅうのがあって。私おてんばだもんでね、戦地の方へ行けれると思って応募して。そうしたら名古屋の陸軍病院、今の国立名古屋病院に入隊する事になったの。

そこにどのくらいおったのかな、半年もいなかったような気がするんだけどね、なるべく地元の陸軍病院にちゅう事で豊橋の陸軍病院に配属になった。でその時に戦争が相当あれだったもんで、患者さんたちが疎開してたわけ。今で言うと飯田線のいたる所、新城とかなんとかの学校や役場へ患者さんが疎開させられとる。私は最後の駅、設楽町の田口まで行って。役場や小学校に患者さんたちがいたからね。角屋（かどや）さんちゅう旅館が寮になってて、そこから通ってた。

陸軍病院勤務の頃
（白衣でなくもんぺを着用している）

だけど八月十五日に終戦になっちゃったでしょう。だから豊橋の病院へ集まれって事になってね。皆引き揚げてみえるでしょう。豊橋の高師の駅からね、患者さんを担架で運ぶんだわ。歩けない人が多いもんでね。なかなか歩きでがあるもんでえらくてね。体調が少し良くなった患者さんで静岡とか遠くの人は、自分の地元の病院へ送るようなっとったけどね。終戦になって兵隊さんばっかじゃなくて一般の人も来るもんだから、とにかく忙しかったね。配属されて豊橋に行った時には名古屋が焼夷弾落とされて燃えておる明りが見えたよ。二十歳の時だったね。終戦後は陸軍病院から名前が変わって国立病院になって、一般の人とか引き揚げた人とかが来る普通の病院になっちゃって。私はずっと内科ばっかにおって、二十三年に結婚するまでそこにいたよ。

結婚・出産

昭和二十三年まで豊橋病院にいたんだけど、そこでおかしな男とくっついて結婚してね。名古屋の人だっただけど、ちょっと男前だったもんでね。私も二十三歳って若かったもんで、どっちかっちゅうと男前のほうがいいと思って一緒になった。結婚式なんて挙げたいとも思わなくて、そこの家へ来てころんと一緒に住んだだけ。家族にはもちろん知らせただけどね。ほの頃は結婚が決まるだけで使ってもらえんくなったもんで退職してね。だけど何て言うの？色男金と何とかはなかりけりって言うじゃない、なまくらだったの。

ちょっと仕事へ行ってもすぐ辞めちゃってね。私が持ってた着物やなんか皆金に換えちゃって。その時分は、パチンコが最盛期でね。足助でも四、五軒あったんじゃない。だから旦那も毎日毎日パチンコや賭け麻雀やっちゃあ遊んどるの。ほいでお金が無くなりゃ私のもの皆売っちゃう。生活がどうにもならんから、私は内職したりしてただけどね。自分は我慢できても子供に食べさせにゃならんかったけど、食べる物が無ければ買うお金も無いしどうしようも無くて。それで本当に恥ずかしい話だけど、うちの向かいのおばあさんに金を貸して下さいって言って三百円位借りてね。ほいで足助の産まれた家へ来て、母にお金をもらって帰ったり。三百円て今でいうと三千円そこらかね。電車賃が無いもんで借りてきたの。

子供は一人流産したかな。一番上の長女と末っ子の次女は足助の在所へ来て産んでね。今一緒に住んでる息子だけ名古屋で産んだの。初子は在所で産む人が多かったけど、うちは、ほいでじゃないよ。金が無いから在所で産んだ。よっぽどお金持ちなら病院へかかっただろうけど、大抵お産婆さんっちゅう人がおったからね。お産婆さんがうちへ来てくれただ。今でいう助産師さん。この辺でいうと岩神の辺に加納さんといういいお産婆さんがみえてね、ほうぼうへ行かれたわけ。一番下の子を産む時はまた在所へ来たもんで近所のおばさんがとり上げとくれた。私はお産が軽かったんだわ。皆みたいに痛いとかわめくとか無くてね、するっと出ちゃうんだわ。私の娘もそうだった。皆よく言うじゃない、案ずるより産むが易しってね。えらい人もあるだろうけど、私んとこの系統は大体楽に産まれちゃうね。

家族と共に島根へ

だけど旦那が馬鹿だったもんでね、連れが島根県の方へ行ってパチンコ屋をやって儲かったから、パチンコやれば絶対儲かるって言われたって。それに騙されて島根へ行く事になっちゃったんだわ。だけど行くにしても金が無くてね。仕方なく住んどった昔のぼっこい家を借りたいっちゅう人を世話してもらって、十年貸す事にして十年分の家賃もらってね。十万位だったと思うけど、それを持って行って昭和三十一年に島根県の田舎でパチンコ屋を始めたの。

島根で借りとったうちは男ばっかの家でね。小学校中学年と高学年の二人と、一人大きい働くようなったお兄さんと三人兄弟で、親が皆亡くなっておって三人で住んでおったんだわ。そんなふうで三年位おったけど、話が違ってパチンコ屋へお客さんなん来んだよ。こっちも金が無いでしょう。パチンコ玉出しては儲からんし出さにゃお客さん来うへんしね。ほんでまた旦那は隣の町へ行って遊んでばっかおる。そこでも結局持ってった着物を質屋へ持ってかにゃならんくなったの。そんなような事ばっか私がしとったもんで、近所の二、三軒下の若い衆がみかねて戸中の兄んとこへ手紙出してくれたじゃん。そしたらね、しばらくして兄と兄嫁が来たもんで何事かしらんと思ったらね、迎えに来てくれたの。だから何もかもほかっといて子供三人連れてね、私だけ帰って来ちゃったの。

旦那とは足助へ帰って来てからは連絡もとってないから、どうなったか知らんけどね。

足助での新生活～三人の子供と～

今の足助大橋のとこの玉屋さんてうどん屋さんがあるでしょう。そこの裏に、天井に穴が開いとって寝とったらお星さんが見える位の小屋があってね。あすこのお婆さんとうちの母が知り合いだったもんでそこを借りて住むことになってね。十年位はおったかな。最初は編み物の内職やったり色々しとっただけどね。通りの所に軍手を編んでみえるうちがあって、そこで使ってもらうようになったらわりかし楽になったかな。だから恥ずかしい話だけど民生委員さんにも関わってもらって面倒見てもらった事もあるもんね。時々話に出るんだけど、いとやさん（青果店）で卵を一人一つずつ買えないからね。たった一つ買って来て三人の子供に食べさせるんだわ。そんなような生活をしとったんだけど、ある時病院の炊事の人手が足りんから来とくれんかって話があって。何でもいいでちょっとでも大きいとこへ行かあと思ってね、その仕事に就いて。炊事に三年位いたのかな。そしたらね、私より三つも上の方が助産婦さんで使ってもらとるって話を聞いたの。それなら私も使ってもらえんかなと思ってね、事務長さんに看護婦の免許証があるで使ってもらえませんかって言ったらね、その時人が足りんかったみたいで看護婦のほうへまわしてもらえる事になって。免許証ってのは大事だね。足助病院へ年とって入ってから若い人達に教えてもらいながら覚えて勤めておっただよ。そうやって何とかやってけれるようんなったのは看護婦になってからだったよね。四十過ぎだったな。そいでも辞める時分には婦長にしてもらえたもんね。婦長の時は十人位部下がおって。案外私は忘れちゃってても今でも声かけてくれる患者さんがあるよ。そうそう定年は五十九歳だった、今の院長先生がインターンで来られた時。今度来るときは院長になってくるでねって言われて本当になられたの。

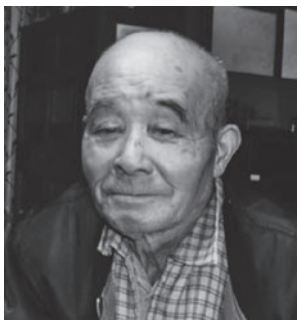
看護師やった事でお給料も良くなって生活も何とかできて、今じゃお陰で年金ももらえるでね。昭和五十二年には貯金と病院で借りたお金とで、今住んでるこの家も建ってね。娘は二人とも看護師になって自立して、今は息子と一緒に住んでるよ。私にとっては今が一番幸せな時でしょうね。

【聞き手・櫻井彩（若林東町）】

里山に生きて

安藤　甲寿さん（上切山町）

大正十三年八月十三日生まれ（九十歳）



甲子の年に生まれて

甲子の年の甲子の日に生まれたね。甲寿の甲は、昔の人は、数をするときに色んなものを甲、乙、丙、ちゅうて使っとったとかで、おじいさんが数の始まりだで「かず」と読めちゅうてつけられたらしいわ。

兄弟は大勢おったがね、全部で十二人生まれたが元気にしとなったのは七人だね。姉さんとうが四ったりと男が三人だわ。

おれんとうのおふくろさんは九十四歳まで生きらしたね。

今はあの九十九歳と八カ月になる兄御がおるがね、正月の二十五日が来ると満百歳になるね。

勤労奉仕

ここ「上切山」に来るまではほうぼう勤労奉仕に行ったね。戦時中だもんでよう行ったね。

市役所ちゅうだかあの地方事務所だったな、地方事務所が行ってくれちゅうて頼みに来るだが。百姓の農家の次男坊ゆうなんに頼みにね。兄御は戦争で米の検査員をする人がなくて、米の検査員に出とった。ほいで俺が姉御さんと二人でやっとったとこへ、そお言ってござるもん。行きてがないもんで困る、東加茂で何人出さなかんでとか言ってついとらせるもんだあ。

四月の終い頃に七か月かけて行ったね。ウラジオストックのサンガトンというとこに、夫婦で入っとらっせる子供の二人あるうちへ行っただけどね。ほで毎日百姓の仕事をやるだけど。行った時分はまだまだ地面が凍っとってね、五月にはいらにゃやれんもんで、凍っとるうちに山へ行って冬の焚き物を切るわけだが。薪を切っとる時にね、鉈は使いつけとっただがやりそこなって、足の踝を切っちゃって。ひといきり動けんもんで向こうの人が悲しがられよった。ほいでも半月ぐらいでようなったもんで、ちんばひいちゃあやっとったね。

ほいから五月のね五、六日くらいと思ったがなあ、上が解けてきたもんで、馬を使って、あの木製のよったような道具を引っ張らせてやっとらせよったが。もしかの時は軍馬に使えるもんでね、大きい軍馬がどこのうちにもあったが、そのやつで百姓に使っとっただね。ほいで何どき何があるかわからんもんで、小銃が一丁ずつ全部弾を置いて保管しておっただ。

どこの家も食料のために豚を二頭くらいずつ飼っとらっせる。売ったり自分で食ったり、自分で食うほうが多かったと思うよ。ほいで狼が来て豚を持ってっちゃうもんで、取られんように、狼が出てくると急いで出て小銃を撃たれよったね。小銃をドンドンと打つとびっくりこいて逃げてくもんで、そんなことをやらかすわ。

向こうではもともとは畑を二丁歩やっとらしただけどね。俺たら勤労奉仕に行くとさいが、農民の畑を借り受けて二丁歩増やされるだ。ほいで四丁歩を二人でやるだあ。草取りがなかなかできんもんで現地の住民を雇うだがね、次の日に来いよと言っておいても朝になっても来やへんもんだあ。「迎えに行ってくれ」ちゅうもんで、畑ばっかの道のないところを家をめがけて迎えに行くだわ。畑の中をまっすぐにね。

十八年に勤労奉仕に行って、十九年にはうちへ戻ってきて、それから兵隊に行ったね。二十一歳になって行っただが、陸戦隊だもんで戦うだかしらんと思ったが全然あらへん、ほうゆうことは良かったがね。

二十一年の家に帰ってきたのが四月のモミを撒く時だったで二十八、九日頃だなあ。ほりゃあとうし、毎年同じようなことやっとるもんで覚えとる。

夏はお蚕飼って、冬は炭焼き専門だね

戦争から帰ってきて二十四歳になるもんで、どこも嫁さんや婿さんがなくて困っとる時だもんで、あくる年の三月にここ「上切山」へ養子に来た。二十二年の春にここへ来ただね。

家内は平成十七年に亡くなったよ。八十六、七歳位だったかな。あの人はね無呼吸症候群ちゅう病気だった。夜寝とって、ちょっと息せんようになるもんで、たたいて「おま息しとらんぞ」って起こいてやると「はあー！」って息しよった。無呼吸症候群なんて知らんもんで、それがもとで亡くなったね。

家内は目が悪くてね、小学校の高等科を中退してうちに居られて、俺はほこへ養子してきたもんで。目が悪いちゅって大事にしとらしたで、いこ働かれんで難儀をしたね。ひと月に二回くらいは医者へ行かにゃなんて。目がそこひ（眼疾患）だとかいって順番に目の病気をやっとられよったわ。明智の眼医者がいいといって行ったり、中金の眼医者にも入院を何度もして。

子供が一人生まれて乳離れせる時分になってから、東加塩に北村さんちゅうお医者さんのところへ入院したことがあって、おばあさんが付ききりで行っとらしたもんで。その間におじいさんと二人で部屋にいっぱいお蚕飼っとって。一か月かかりゃ繭になっていくわね。まあじき繭になる時分に入院せられて。十日ばかおじいさんと二人で桑を摘んできちゃあお蚕飼うだが。夜さ、芋の皮向いて、一鍋おかずを一日分煮といて、夜なべにご飯を仕掛けといて。夜さ、お

蚕飼って寝て。朝早く起きて、おじいさんがお蚕飼われる。炊けたご飯をお櫃に上げといて自分もご飯食べて、おじいさんも先にご飯食べて行って桑摘んどらっせるもんで、後から飛んで行って。桑を背負ってくるだけじゃあ足らんもんでね、牛で橇を引いてって、その橇にこんな大きな籠を四つぐらい積んでね。いっぱい桑を押しこんで、保存しとく穴倉に桑の葉をだして、生のいきっとる葉は蚕が喰わんで、じょうろで水をかけて、ほいつを持ってきちゃあ朝昼晩三回やるだもんでね。籠に四杯ぐらいなけにゃ。午前中に摘んで、一日三回分積んどかにゃあいかん。

お蚕を飼うときに使う藁を編む道具

夏はお蚕さんは三回、春蚕と夏蚕、秋蚕と飼うだね。一か月くらいで終ってくもんでね。一か月くらい餌やると生繭になるもんで。田植えをする前に最初のお蚕を飼うだね。春に桑の木の小さい葉が出かかると最初の春蚕が出るもんで、飼いながら苗の準備をして田植えの支度をする。木の葉っぱがこれくらいになってくるとお蚕が一人前になって、繭になると出て行っちゃう。そうすると苗がしとなう、田植えが始まる。そいで田植えが済んじゃうと夏蚕が始まる。田の草がなるべくしとなってこんうちに、田の草取りが始まらんうちに夏蚕を飼う。ほいで穂が出だすとさいが秋蚕を又飼う。三回飼うだね。ほいで色がついちゃって出荷出来んかったような繭は中の虫を煮て醤油で味付けて食べるだわ。

秋蚕が終ると稲刈り、稲刈りが済むとすぐ麦撒くだね。麦撒きが終っちゃうと炭焼きが始まる。

うちの山の雑木を切ってね、ちょうど二畳敷き位の炭窯作って、木いっぱい立ててね、穴掘って木をいっぱい積んで、ほいから木の上藁をやって、焚き物で屋根の形に作って、土が下へ落ちんようにむしろ引いて、赤土をたたっからかいて締めてくどみたいに造るだね。ほいで火を焚いて燃えつく。こうやって炭窯を造るだが。

蚕飼って収入する。冬向きは炭焼きするだわ。

製材の仕事

俺あ百姓がたくさんあるもんでよう出ていかんで家でがんばっとったけんども、景気よくなったもんでわきへゆくちゅうことになってね。お蚕がすたりだいたもんで、俺も近所で働くとこないかって製板へ行き出した。三十八年の秋が済んでから出だいたわな。

波多野製材で十年くらいおったね。ほいで小渡に大きな工場作らしたもんで、みんなそっちへ行かしたが、俺あ足助に残って小島製材に変わって十一年居ったな。

その当時は自動車をね、部分々々にして、組み立てる前の物を箱詰めにして入れる。エンジンやなんもひとつの箱に五つ入れる、ボディのとこも幾つにも分けてね、箱詰めにして送る。その箱を最初は足助で作っとってね。ほいでその箱作る板を俺が箱になるように寸法に切ってやるとみんなが釘で打つだわ。そうゆう事をやっとったわね。

終いは六十歳で定年だっただが、まあ六十五歳まで働けるで働こうと思っとったけども。その頃からずっとチェーンソーで直径が三尺五寸から四尺もある大きな丸太を切らにゃならんようなっちゃって。オーストラリアからくる木はこんな太い木だもんで、チェーンソーの刃はこんな長い訳だわ。両方から切ってやっとこさ切れるくらいの木もあるもんでね。ほいで大きなチェーンソーを使うだが、冬向きは特にエンジンがかからんだわ。エンジンが混合でかけるもんでね。えらいえらくてしょうがないもんでまあ六十二歳くらいにやめちゃった。

それからは冬の仕事にうちの藪の竹切ったりしとった。そんなようなことだ。

在所の兄御と共に

足助の宗恩寺に十何年花立てに行ったね。代々うちの衆が行ってね、花立てることになっとっただね。三代続けてやっとった。

お講さんちゅうて一年に一回勤まることがあるでしょう。ほん時の花を立てるだわ。こんな大っきな花を、あれを立てに行ったよ。兄御がお寺さんの大世話方やっとったもんで兄御について習ってほうぼう行ったけどね。大きな曲がったような枝を芯に立ててほいつに縛りつけたね、松の枝の格好いいやつを。一日前の日にね、こう枝ぶりのいい松を切って、ほいからね栂の木。栂の木ちゅうやつがあるがほいつを上へ登ってってこのくらいの大木に縛ってね、前の日に支度しておいて、ほいつを持ってお寺さんへ行くだ。最近は兄御が歳くったでやらん。だいたい兄御が木に登るのが嫌だもんで俺が木に登っちゃあ松の木なんかを切るだわ。

兄御も体が弱くなってたまに病気するもんでね、大島から岡崎に出て行った林さんゆうお医者さんとこいかにゃ治らんとゆう気になって、俺が車に乗せて岡崎へ十一年通ったかな。そのあと足助の小石川さんへ行きだいてから十五年にくらいになるか。二週間に一回ずつ送り迎えしとるだ。兄御もやっとこさ歩いとるくらいで、まあほいでも一人で車に乗れるもんで乗せちゃあ小石川さんへ連れていくだわな。

【聞き手・清水景子（井ノ口町）】

写真店の商売を続けて来られたことに感謝して

宇井（うい） 司郎（しろう）さん（足助町） 昭和七年七月八日生まれ（八十二歳）

今は息子夫婦と孫と暮らしとる

生まれは現在地の田町で、今は、わしんたあ夫婦と、息子夫婦と孫と暮らしとる。住所としては足助町石橋。孫は二人おるけど一人は昨年嫁入りしちゃった。娘に養子さんが来とくれて写真の仕事をやってくれておる。

父親がやっておった『かのや旅館』

父親は旧阿摺（あすり）村（昭和の大合併で足助町に編入　旧・足助町の北部）から足助町へ移り住んで、かのや旅館という旅籠（はたご）をやっとった。飯田街道沿いだったので、旅人のお休み処。ちょっとお茶飲んでとか、一杯もやっとったかもしれんけど。旅人が割合に昔は往来したわけだね。女中さんが二人から三人ぐらいおったよ。料理は、親父（おとっ）さんがやっとった。

日暮れになると、近在の山持ちの方が、酒飲みに来ただな。賀茂（がも）（賀茂村：旧・足助町の東部）が一番多かったね。

まちの中には料理屋、旅館、魚屋、八百屋がたくさんあって、繁盛して活気があった。栄えておった。小学校時分はそういう覚えがあるだ。

岡崎の時計・カメラ店に住み込みで修行に

姉御が足助小学校で先生をやっておって、上の学校へ行け、行け、ちゅってすすめてくれただけど、勉強はあんまり好きじゃないもんでね。勉強やるより、なんか商売か、大工さんとか木工とか、机つくったり、ほういうことのほうがいいちゅって。ほいで、昭和二十二年三月に足助中学を卒業して、親父が岡崎で木工とか商売をやる店を探いてくれただけど、敗戦したときでもあって、空襲で焼けて、バラックのような店が多くて食糧事情も悪かったもんで働く店がなかった。どこっていうことは、まんだ決めてはおらんのだけども、だいたいうちが足助だもんで、まぁ、足助へ戻ってくるっちゅうことで働く店を探しておっただけどね。

ほいでも、探いてもらったけども、働く店がみつからなんだもんで、遊んでおってもしょうがないちゅうことで、岡崎で、時計、カメラの店を営んでいた親戚があっただ。とりあえずそこへ住み込んで勤めたということ。当時給料が月に三百円だった。

昔の現像は一枚一枚大変だった

店では時計とカメラをやっておったけど、時計のほうは手を出さんでカメラのほうをやれっちゅうことで、カメラと写真用品の販売をやっとった。それと、フイルムの現像と写真のプリント。写真の修行ばっかりやっとったね。

現像するときの薬は五種類ぐらいあって、目分量でぬるま湯に溶かしてかき混ぜて作っておった。そのうちに天秤のハカリで、十グラムとか、二十グラムっちゅって目方を量ってやったこともあるけどね。定着液も作ったね。写真は暗室で一枚一枚焼いてね。フイルムの現像も暗室で一本ずつ現像するだった。暗室の中でフイルムを現像液に入れて、その当時は白黒写真だもんで、だいたい目で見た加減で色の黒さが調度良うなるまで待って定着液へ入れる。そうすると止まるもんでね。暗室は安全ランプっちゅうのがついておって、暗いもんで絵は見えんだよ。だから色の黒さでだいたい良かれっちゅうところで定着液へ入れちゃう。定着液に入れて五分とか十分とか、新しいうちは抜けが早いもんで五分ぐらいでいい。ちいと定着液が古なると十分くらい。ほうすると遠目で絵が出てくるね。時間は温度によっても多少違うしね。あんまり熱い湯の中に入れちゃうと膜面が取れちゃうもんで、液の温度は十八度とか二十度とかちゃんとやらないかんわね。フイルム用と写真を焼き付ける印画紙用の現像液は違うけん、印画紙の現像液でフイルムもやれたけんね。粒子がちょっと違って、印画紙のほうが粒子が荒い。

現像したフイルムを水洗いして、太陽に当たっちゃいかんもんで日陰のようなとこで干（ほ）いてね。乾いたら暗室へ持って行って、伸ばし機っちゅうのがあって、その中にフイルムを入れると下に絵が写る。大きさとピントを合わして印画紙を入れて、何秒ちゅって焼いて。焼いた印画紙を取り出して今度は現像液へいれる。何秒焼くかは絞り加減で、グーッと絞れば暗なるわね。ほうすると、やっと焼かないかん。ちいと絞って焼けば早よ焼ける。ほいだけん、絞りがあんまり浅いといかんね。ピントは絞りを絞ったほうが綺麗に出る。ほれはまぁ、慣れだね。

調度良うなったら定着液に入れる。定着液へ入れるとストップするもんで、ほいつを今度は水洗いする。ほうやって、一枚一枚焼くだった。

写真撮影の見習い

自分が足助に帰って店を開業するには、写真が写せんといかんと思って、岡崎の伊藤写真館へお願いして行って、三年余勤めた。親戚のうちに住み込みでそこから通った。記念写真、集合写真、結婚写真とか、写真撮影の見習いを一通りやったね。写しの修行もいろいろあるだわ。

とにかくここの写真館で三年の余（よ）勤めて、両方で合わせて十年くらい岡崎におった。

足助に帰って『ツカサカメラ店』開業

昭和三十一年十一月三日に足助に帰ってツカサカメラ店を開業した。すぐそばだけど、今の場所じゃなくて

石橋湯（銭湯）の隣。こまや（飲食店）とのあいさを借りてやった。今は塀がやってあるわ。あそこに店があった。今の場所では親父さんが旅館をまんだやっとったもんでね。帰ってきたときは旅館とカメラ店を重複して両方やっとった。開業して仕事も忙しく、高度成長期でもあって商売も順調に行った。昭和三十三年の十二月二十五日に、妻、弘子と結婚し、忙しい仕事を二人で力を合わせてがんばった。

昭和四十二年七月に宿屋『かのや』を廃業して、今の場所にカメラ店を新築オープンした。親父さんたちが辞めたいちゅって、ほいでまぁ商売替えしただね。その後改装して、『写真のつかさ』として現在まで長年商売をがんばっています。昭和三十年から三十五年くらいの間、高度成長期で非常に景気が良うなったもんね。カメラも売れたし、現像も忙しかった。飯も食べんでやっとった。ほや、夜中も仕事をやったよ。

足助に帰って開業した『ツカサカメラ店』

カメラも変わった

カメラも変わって来たね。形も変わったし。二眼レフカメラちゅうやつもあったよ。二眼レフちゅうのは二つのレンズが付いておるもんで二眼レフ。一つのレンズは二眼レフちゅわんもん。二眼レフは構図がしっかり見える。構図が上から見えるもんで、上下がどこまで写真に入るかっていうのが分かる。すりガラスがあって、レンズを通してすりガラスに画像が出てくるわけ。レンズを通して写るわね。ファインダーは上に付いとるだ。上のレンズでピントを見て、下のレンズは写るほう。別々になっとる。

最後のほうだと一眼レフとかになってレンズ交換ができてね。一眼レフはフイルムに写るのにレンズを通しとるし、ファインダーもレンズを通して見とる。一眼レフのはじめの頃はフイルムの前に膜みたいなシャッターが降りておった。今でも一眼レフは持っとる人があるわね。

カメラメーカーは、ニコン、ミノルタ、キャノンとか、フジカやそのほかあっただな。今どこもカメラ（フイルムカメラ）は作っとうへんもんね。もう、デジカメばっか。まぁ、ほとんど無いじゃない。カメラは無い。

写しの仕事は心配な仕事だよ

写しも結婚式とか、成人式とか多かった。写しの仕事は心配な仕事だよ。フイルムがガラスのときやなんかは、詰めて行って自転車で揺すってきてガタガタやってると、ペキンと割れちゃって…一遍あった。現像したら割れとるもんで、そのままそおっと加工所へ持って行って膜面を加工して直してもらってやったけど、まぁまぁにできたじゃなかったかな。下はガラスだもんで。写っとるのは薄いベラベラの膜面だけだもんで。そこだけをなんとか加工してやってもらって。あれは結婚式だったな。集合写真。二人やなんかのは良かっただけどね。割っちゃったちゅっても、知らんどって割れちゃうだな。

写真を写す時は目で見て合わせるだもんで、合わせ方が悪くてピントがちょっと甘いとか。写真屋はやり直しがきかん。ほいだけど、どえらい変な大失敗はなかったな。結果が出るまでは心配だったね。昔は結構需要はあったな。仕事はあったね。

デジカメが出てきてから良くない

今はデジカメで、現像もみんな暗室の外でやれちゃう。デジカメのプリントなんか、枚数がなきゃあ十分もありゃあ、待っとるうちにできちゃうもんで、ほこでちょっと一服して、お茶飲んどっておくれんって言っとるうちにできちゃうでしょ。こっちで商売をはじめて、ずうっとよかったよ。デジカメが出てきてから良くない。

ほいでやっぱり、官公庁がみんな足助から出て行っちゃったしね。県事務所でも行っちゃうでしょ。保健所も行っちゃう。ああいう、官庁関係の合併やいろいろ、あれからよくないな。県事務所の林務課なんか、ほとんど毎日現像を頼まれてやっとった。現場監督の人が、撮ってきてくれるもんで。土建屋さんも建設会社もいっしょ。ほういうのを現像しておったでしょう。今はもうデジカメで写いて、ほのデータを向こうへ送っちゃうだらあ。ほうすると向こうで見て、いるやつだけプリントするだかどうだか知らんが。ほんなことで、写真屋は官庁関係、建設関係、あかんね。

写真屋もだんだん減ってきた。足助ではうちともう一軒だけだ。豊田でも二十何軒あったけど、今は十軒くらいしかあやへんもんね。愛知県全体でも、写真屋さんは三分の一だもんな。減っちゃっとる。商売が厳しいのは今。長く言やあ、このところの十年近くがいかんかな。

足助の商店街活性化

足助へ帰って商売をはじめて五十数年になるだね。その間、地元の方や発展会の方々と地域の発展を話し合ったり、会合をしたり、友好会を発足して、毎年新年には、静岡県袋井市の法多山（はったさん）へ日帰りでお参りに出かけとった。二十年近く行っとったな。

商工会の役員は会長とか理事とか入れりゃあ三十年くらいやっとるもんね。会長は九年やったかな。愛知県と足助町から、商売活性化に尽力したということで表彰をいただきました。私はそんな器ではありませんが、みなさまのご協力のおかげで感謝してます。

社会はめまぐるしく変化しており、足助のような中山間地では商店街が衰退し、静かな町並みになってます。現在足助では、町並みの活性化に力を入れているので、活気があふれ繁盛する商店街になることを期待します。

【聞き手・高木伸泰（則定町）】

愛ちゃんの意欲とまごころ

河合　愛子さん（富岡町）　昭和八年九月二十五日生まれ（八十一歳）

女は、「学問よりも特技だ」……!?

生まれは、もと東加茂郡の盛岡村の四ツ松だがん。旧姓は大須賀。兄ふたぁり、姉ふたぁりで、私が末っ子。母親に「四十四の恥かきっ子だぞ。」って言われたこと、よう忘れん。私と姉が十五だかちがうもんねぇ。両親と私らきょうだいの七人家族だった。

保育園だとか？　ないない。家庭保育。かぞえの七、八歳ぐらいから冷田小学校へ六年まで行って。それから新制中学校に入って二年で卒業。

高校は定時制っていうのがあって、それに「私も行こう。」って思ったじゃん。それで申込書もらってきて書いて、いちばん上の兄に見せたらね、「女なんて、知恵なんか身につけるもんじゃない。それよりも裁縫やなんかならって嫁に行け。」ってねぇ。そのときは、ほかのきょうだいみんな、もう家を出てた。親はなんとも言やあへんかった。

ほんで、裁縫を二年間。自宅から四キロメートルか五キロメートルのところに歩いて通って。

二年過ぎたとき。私のすぐ上の姉が松平町に嫁いだ先がガラ紡工場で、そこのおじいさんが、「うちへ二年くれば、おまえの嫁入り支度のタンスぐらいはやるぞ。」ちって言うもんで。それにほだされて、住み込みで二年間働いたかな。

そこで働いとるうちに、豊岡のおばあさんの妹がね、私でいうと義理の母の妹が、私の父親のきょうだいんところへお嫁に来とっただわ。それが「私の在所へ行ってくれ。」ちうもんで。「在所だで、絶対いいで。」ちうけど、むこうはふたぁり、失敗しとって。

私は「初で」なのに、むこうには三人目だった。でも、兄がまず第一に賛成しちゃった。親は、兄に従ったねぇ。ほんだもんで一回ぎし、顔は見た。主人は昭和四年生まれ。

女人生にも、休息必要

平成四年に主人がパーキンソン病とわかって、他界するまで二十何年間かなぁ。はじめから介抱がいるわけじゃあなかった。さいご十年だね、介護がいるようになったの。テレビでね、「パーキンソンには、京都と九州の熊本と新潟と東京。そこの四つの病院しかない。」っちゅうじゃん。まずは月に二回、京都に二年通った。で、主人がだんだんと、ホームを歩くのがね、えらくなっちゃって。こんどは横浜の南厚生病院。そこで脳の髄液の手術して。平成十五、六年かなあ。だいぶ、つらくなってた。

ちょうど私が婦人会の代表で発表せな、いかんかったでね。

私は、新盛支部の一年間の事業の、地域活動内容の話を発表した。小学校の学区ごと、盛岡、冷田、佐切、新盛、則定、追分、大蔵、御蔵。その各支部から一人ずつ代表が出てくる。そのために主人を秋田に湯治においといて。四百字の原稿用紙に二枚か三枚書いて、練習した。発表をきくひとは、婦人会の会員全員。五、六十人おった。公民館なんかなかったから、足助小学校の体育館、講堂。私が弁論大会に出たのは一回だけ。

その当時からかねぇ。婦人会に、部落のお役で出るたんびに。偉い年配のひとたちが、あいさつせられるとね。「ああ、私もあそこまで行きたい。」という願望がね、まず支部長から始まるでしょ。次は足助町全体の支部が出てくるもんで、町の会長としゃべるだら？　そうすると、今度はその上が郡の会長じゃん。東加茂郡ちゅう。「長」は選挙で選ぶんだけど。私が支部長になったのは昭和六十二年だよ。会長がその三年ぐらいあとだけどね。もう平成。で郡の会長になったじゃん。このへんでいうと東加茂郡、足助、下山、旭、全部だもんね。で、今度は郡の会長から県の指導員。およそ二年ずつ。とにかく休みなしで、ずんずくずんずく上へあがったね。

女なりの、意地と根性

平成二十三年の三月の十五日に主人が他界してからね、子どもが、だれかしら月に一回は見に来るようになって。私が落ちこんどったもんねぇ。ふた月ぐらい、ふさぎこんでおったと思うよ。ほいで、子どもたちが「うでがあるだもんで、商売やりん。」って言ってくれた。

漬け物を、私が自分で作るようになったのは、結婚してからだね。それまでは、ほとんどやったことがない。コンニャクも、作り出したのなんか、昭和六十二年ごろから。どうやって作り方を覚えたんだか、自分でもあんまりわからんねぇ。だいたい、このへんじゃ、どこのうちでも、みんながやっとることだから、なんとなく知っとった。わからんときは、だれかに聞くし、なんでも自分で工夫していく。「麹を洗って使おう。」とか「どの野菜を、どういう切り方で入れたら、

もっとおいしくなるかなぁ。」とかね。
そりゃぁ最初は失敗もしたし、たくさんは作っとらんよ。ただ、一定の分量は作るし、家族以外にも食べさす機会があるでしょ。おすそわけとか、おみやげで友だちに分けてあげたりさぁ。そしたら「おいしかったで、また作ったら分けて。」とか「もっと、欲しいよ。」とか注文されるようになった。まわりに好評だから「それじゃあ。」と市場にも出すと、これが評判が良くて売れる。
次男が作ってくれた屋台でも商売、やった。「愛ちゃんち」って、ヒノキの看板を出して。野菜、漬け物、金山寺、手作りコンニャクなんかを売ったけど、たくさんのお客さんが来てくれてねぇ。今は、屋台を使わないで、注文を受けとるけど。

てづくりの店「愛ちゃんち」

大量の野菜を切り刻んで、大量のコンニャクイモをゆでて練り上げる。しっかり練らんとだめ、練りの足りんコンニャクは「さくい」もん。きちんとした弾力のある仕上がりにするには、とにかく練らなあかんよ。だから汗かいて練った。半年間のシーズン中に百キログラムのコンニャクイモを使いきったもん。それに大量の漬け物の注文にも応じた。秋から冬の半年間、がんばると、腕がものすごく痛かった。「シーズンが終わると治るから。」って、放っておいたら、だんだん治らなくなって、痛みが残るようになったね。何年も何年もかけて、腕を酷使したってことだろうねぇ。とうとう「痛い痛い。」って、なんにもできなくなった。ぞうきんを絞るような動作がつらくなって。手首に力が入らない。台所で包丁が持てない。手術するしかなくなった。
両手ともコンニャクの「練り」で、腱鞘炎（けんしょうえん）になっちゃった。手根管症候群じゃあなくて、ひどい腱鞘炎。そんな激痛でも自分で運転して名古屋の病院まで行ったよ。
はじめ、平成十七年に左手切って。もちろん、入院した。だから、その間主人がショートステイに入っとったもん、右手は平成二十一年だよ。六月ごろ。左手はそんなに傷が大きくないけど、利き手(右手)は大きかったねぇ。カネノテに切ったる。すじを切って、移してくっつけた。
後遺症、あるよ。ちょっと硬直があるし、肩のほうまで痛いのが来るもん。百姓が忙しいときには痛くてつらい。

女人生への、ご褒美

T-1（ワン）グランプリへの参加はね、次男が「おばあさん、一回やってみりん」ちったもんでさ。Tは「つけもの」の頭文字の意味。1は「いちばん（おいしい）」ってことだろうねえ。日本全国の漬け物関係者が企画して二〇一〇年からやりはじめた漬け物の味の競争なんだけど。一年に一回、参加者を一般公募して業界の人たちが審査するの。
びっくりして「いやぁ、だめだよ。そんなん、上には上があるだで。」ったちってゆっただけど。次男が「出りん、出りん。」って、申し込み手続きを代わりにやってくれて応募。
去年のことだよ（平成二十六年現在）。平成二十五年（二〇一三年）十一月の二十四日が第四回目の中部大会だった。試食用の金山寺味噌は百二十人分持ってった。ひとり分はカレースプーンで二杯くらい。次男夫婦と娘との三人で手伝ってくれた。私は、かすりの着物を着てね、赤い前かけで出たよ。
漬け物業者がいっぱい。挑戦者は二十人ぐらい、金山寺味噌の同類はひとりもおらんかった。デザインのいいひとがいっぱいおった。たくあんはなかったと思うけど、サラダ式や、カボチャのスープのようにしたり、赤いラッキョウだとかね、彩り豊かにいろいろと出てた。
遠くのひとも来るから午前中は準備だね。競技・審査はお昼から。一グループが終わったら「はい次どうぞ。」って、流れ作業でやっとった。審査員は三十人ぐらい、壇の前にテーブルとイスが、ずーっと並んでね。そこで試食をして、なんか書き込んだりね。少しの時間で試食会をやって、すぐにもう審査発表。表彰式の壇上へ上がって。私は、いちばん若番だったもんで、いちばん隅（ぐう）に立った。
ほいで、「いちばんはじにおったで、いちばんはじめに呼ばれただかな。」って思ったら、「最優秀賞者」っていうじゃん。「ええっ、私がぁ？やったぁ！」って、やったのを息子が前で写真に写いといたじゃん。優勝するとは思わへんら？
表彰されたときには涙が出てきたよ。八十になって、ここで集大成だね。

女ひとり暮らし、これからも笑顔で！

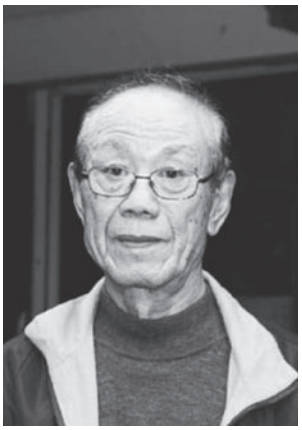
ひとり暮らしやっとるから気強いようなところもあるよ。なんでもひとりでやるしかないわ。おじいさんが死んだときに息子たちがねぇ、「うでにちからがあるだで、やりん。」っちって言ってくれたことがあったからこそ、いまがある。いまは、楽しくてしあわせ。

【聞き手・大竹尚美（大坪町）】

上八木を語り継ぐ

小澤 晃さん（上八木町）

昭和十五年六月五日生まれ（七十四歳）



上八木町小字山中

上八木町はね、昔の名前でわしらは本郷って呼んどるけど、本郷って言えば上八木のことであって、ここは山中って言ってね。役所の上では上八木町だね。足助町になる前、東加茂郡賀茂村の時の呼び方だね。

山中字中平。中平は地番だね。だからね本郷と山中っちゅうのが大字。山中の中に下貝戸と中平と百々っちゅうのがあってこれが小字になるわけ。ほいでこの部落の者だけがしとる呼び方があって、集会所の東側に家があるでしょ、そこらへんが上の切、集会所から西側が下の切。山中は十一軒だけど、二軒ばか今は空き家になっとるね。だから今は九軒だね。ほいで年齢はわしんたちぐらいのばっかりになっちゃったね。

賑やかかったよ

長男で生まれ、その時の家族構成は、大おじいさん、おじいさん、おばあさん、親父さん、お母さん、親父さんの兄弟で妹と弟が三人、私と七つ下の弟と十人家族、賑やかかったよ。今思うと大家族だね。今は妻と二人だね。

小学校時代

同級生はほとんど長男で、男が多かったね。ほとんどの家が二人、三人ぐらいずつ、学校行きおったもんで、子どもさんが十何人おったから、賑わしかったよ。クラスの人数は四十三人だったかな。それが六年生まで。今だとその半分ないじゃないかなあ。

通っていたのは明和小学校でね、ちょうどここから西側に見える高い山があるだけど、高い山のところが笹ケ田峠で、笹ケ田峠を越えて、もう一つ向こうの部落、五反田を通っていって、もう一つの山を登ったちょうど頂上に学校があるね。小学校のある明川っちゅう部落に国道が通っとってね。国道一五三号線の明川の部落からまた上がってきた頂上に学校があるもんで。子どもの足で五十分かな、一時間までもかからんかったかな。四キロはあるよ。山道で、今みたいこんな舗装じゃないもんでね。砂利道で、まあやっとこさ人が一人、通れる道だわね。

お蚕さん

「大きな家だね」っちってお客さんが言わしたもんで、大きいっちって、養蚕もやってたもんで。昔は養蚕はやるは、冠婚葬祭は自宅でやるだら、親戚や近所の人が一堂に入れる家じゃないとやれないもん、養蚕はなおさら場所がないとやれないもん。飼っていたのは一階でだよ。うちも居間が一、二、三、裏側に一、二、三と六つある。人間様は裏側の一間で寝起き、子どもも一緒の部屋で寝りよって、養蚕は昭和二十八年ぐらいまでの小学生時代までぐらいだな。

養蚕も繭になるでしょ。繭を大きな籠に入れて、その籠は、玉入れに入れるようなもののもっと大きいので、直径が七十センチメートルぐらい、丈が一メートル二十センチメートルぐらい。繭って軽いから二つも三つも背負ってくだった。横にして持ってくだけど、袋に直に繭を入れると潰れちゃうだら、袋に籠を入れといて、ほの袋に繭を入れて、背負った時に、縄かけたりするもんで籠は潰れ防止だね。籠をきゅっとやって二つか三つ背負って、運搬したんだ。あの当時はね、萩野小学校の辺りまで背負って歩いたよ。萩野小学校だと十キロメートル近くあるね。全部歩きだもん。時間は二時間じゃ行けんね。半日がかりだね。そこへ加茂製糸から車が来てくれて。お蚕さんがあるから現金収入が入ったんだね。

山中の十一軒は養蚕をやっとった。ほいでわしら小学生の時分に、学校から帰ると平均、私の親たちは百姓時期だもん、ちょうど五月からかな。親たちは百姓に出ちゃっとるだ。今じゃ田んぼに薬、蒔いちゃうけど、「田の草とるだあ」「畑やるだ」っちって、わしんたちの年代の頃はおじいさんおばあさんが帰るの待っとって、お蚕さんに餌やらにゃいかんだ。三度、三度。餌やりを全部手伝わされて、嫌で嫌で、川行きたくて、川行きたくて、その記憶が強い。みんなそうだわ。「これやってからじゃないと川いっちゃいかん」っちって。だから畑も桑畑ばっかだった。今は桑の木は取っちゃって野菜畑にしとる。あの当時は桑畑が主であとは自分たちの野菜を作る程度しかなかった。ほだけど桑の木が大きなると、桑イチゴがなる。美味しいけど、真っ青っちゅうか紫になっちゃってね。アルコール作る原料で桑の酒とか、ものすごい強い酒が出来るんだわ。だから「食べすぎるといかん」っちって子ども時分に親から言われっとって、口が青くなるから食べたことわかるじゃん。「あんた桑イチゴ食べてきた」っちっちゃ、叱られるじゃん。

常連に支えられ十九年

ちょうど高度成長期時分かな、豊田の自動車関連企業が募集しだいたわけ、マイクロバス出すから、どんどん人を募集してね。わしがちょうど三十の歳かな、豊田へ出て会社勤めをしだいて、ここから通ってた。ほだ

けど、たまたまおふくろが病気になっちゃったもんで、「家庭連れてって看なさい」っちゅうことになっちゃって、ちょうど二十六年間勤めたかな。あと四年で三十年なるとこだったけど。女房もほの時は勤めしとったけど、二人がついとってもしょうがないし、そういっても「車で働きに出るようなとこにも行けない」っちゅうことで、何かあれば一人がすぐに行ける、親を看ながらできることないかな、と思って喫茶店を開店したのは、平成八年三月八日だから十九年目だ。お店の名前は杉の木が多いから「杉の子」にしたね。まあところがところだし喫茶店以外は考えなかったね。なかにゃ、「こんな山の中で喫茶店」なんっちゅっていう人もあったけど、わしんたちも、家の近くでっちゅうことが第一条件だったからね。メニューと値段は平成八年の始めたとこの、そのまんま。消費税が上がってもね。

メニューはいろいろ試したんだけど、まずは五平餅と氷、コーヒーとミルク、ジュースぐらいにして、あとはうどんとかそばぐらいにしとこうかなと思ったんだわ。そのうち、だんだん、だんだん、お客さんがお腹も「ちったぁ足しになるもの」とかなんちって言わっせるもんだなぁ、要望があったりして増えただけどね。どて煮とかもあるんだけど、当時はね、多少こういうものもあると、つまみになってね。

「杉の子」外観

五平餅は全部自分で作れるでやっとるだわ。お米の品種はこの辺の農協の銘柄で「ミネアサヒ」だよ。ご飯をすりこ木で練って、型を入れて作るもん。親がやっておるのを、みようみまねでね。何かお祝い事があるとか、人が寄るとかというときは五平餅とかそういうものはごちそうだったもん。五平餅づくりが生活の中にあったね。串もね。それこそ間伐材利用して。串は杉の木じゃないとね。ダメっちゅうよりも匂いがついたり、木の変な匂いがしちゃいかんもんで。殺菌作用もあるしね。串はいるたんびに、ある程度三百本なり五百本作るね。ご飯は一回には平均すると十～十五本ぐらい作っとくんだけど、まあ土日になると倍ぐらい作るときもあるね。練る時間は一升っちゅうか、十五、六本作るなら一時間ぐらい。ご飯さえできればいいね。型も杉の木を使って自分で作ったよ。味噌はね、食べとくれるとわかると思うけど、五平餅は家ごとに違うね。わしは赤味噌が基本で。ピーナッツとクルミとカヤの実。あとはだしに削り節、鰹節やシイタケとか入れてね。クルミとかカヤの実とかっちゅうのがいいんだわ。カヤの木はほいでもこの頃ないなあ。なんちゅうかな樅の木みたいな木だね。植物性のもの、植物油にとても体にいい成分が入っとるもんで、香ばしめがでるっちゅうのかな。

なくなるのがさみしいからね

ここの部落の全土の地図を部落の長老の方が昭和三十八年ころかな。白黒の写真だけど、撮って保管しといとくれて、こういうものがあるっちわしてね。写真を拡大して、おくれたもんで、今、集会所に置いたるけど、当時は下の切の辺までずーっと一目で見えよったの。木がないから。今は木が植えたるけど、ここは畑だった。草刈り場と畑、草地ちっちゅうんだわね。この草地の木のたっとるとこは、全部田んぼだったから、一目でずーっと見えるぐらい開いとっただわ。

この間も、写真を持っとってくれた人や、部落の人にも話し合っとるけど、この部落は昔からの「言い伝え」とか「旧跡」とか結構あるんでね。この部落として言われを書き残して、我々の時代まで分ぐらいまでは残いとかんと。こういうとこもあって、こういう時代をみんな過ごしてる。我々の覚えがある聞いた範囲内しかわからんけど、「覚えがある範囲でいいで残しとくか」ということを話しとってね。残せるとこは写真で。わしたちとしても、誰に見て欲しいとかそういうじゃなくて、「なくなるのがさみしいからね」。それがね、孫の代にどうなるにしようが、そういうものがあったら、一人でも、「こういう部落だ」って、「こういうおじいさん、おばあさんしとったのか」って思ってくれればね。

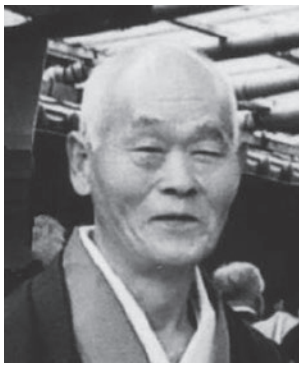
今は、旧跡の事実、例えば灯籠が建っとったり、弘法さんがあったり、神様があったりっちゅうとこ結構あるんだけど、わしがぼちぼちと写真に撮って、わかる範囲で説明書きを残したいなと思って、ちょっと始めとるとこなんだけどね。ほいで何年か前かな、足助町時分にお宮さんの周囲に「杉の木の大木」があったり、樫の木の結構古いのがあって、樫の木はね、確か「町の遺産」になっとるじゃないかな。史遺産とかなんとかいうこと聞いたことあるね。

そういうのを一覧にして集会所に貼って、寄合（毎月世帯主さんが出てくる集会）や、お祭りやなんかは女のかたや、年寄りのかた、子どもさんも来るもんで、その時にはその一覧をみてもらって、この部落はこういうものがあったなっちって見てもらえたらな、ちゅうことを考えているね。

【聞き手・加藤洋実（西山町）】

木切りと木出しの職人にならあ

河合（かわい）　三一（みついち）さん（白倉町）　昭和六年四月十八日生まれ（八十三歳）



「わるさんぼうず」

名前は、河合三一、昭和六年四月生まれ。兄貴は一三とつけてかずみというんだ。めんどくさいし、ひっくり返しとけって。ほんで、三一って、おれのおやじはそんなだぞ。生まれは、賀茂村の綾渡（あやと）っちゅうとこで、そこでおやじが馬で運送してやった。兄弟は八人おったよ。おれは五番目。上三人が女で、ほれから兄貴があって、わしだ。ほいで、妹が二人に、弟が一人。

兄弟が多いで、小学校行くまでは東大見で、おじいさんおばあさんと、一番上のねえさんとでみてくれた。大事にみてくれてのう、親よりありがたかったなあ。今でもそう思う。

小学生の頃はひと口にいって、「わるさんぼうず」。普通の子のように、下の子をいじめたり、女の子をいじめたりのう、そんなことはできなんだ。そういうことをせんが、先生に叱られるのが、一番だった。

貧しさが教えてくれたものの大事さ

子ども時分には貧乏やでのう、難儀したで。それが人生を分けたかしらんがのう。働かないかん、ちゅうことを覚えた。そういう生い立ちだわ。学校行くに、ズックがないだんだ。買えんだもんで。ほいで、わら草履作って、夏やなんか通し履いて行くよってのう。ほいで、雨降って困ると、下駄の古いやつにわら草履打ち付けて履いてくだ。ほいだと、浸むらんからのう。

ほいだでのう、ものは大事にしとる。道具は大事にせにゃいかん。これのおかげで仕事ができて、それだけは身にしみておるだ。道具のおかげで、飯をくっていけるだって。道具なんやって、ぽいってほかっておくなんちう、そういうことはせんのう。ほいだもんで、十六の年に買ったのこぎりは今でもあるでのう。

見て倣（なら）って覚えた山仕事

十六から山仕事始めただが、隣のおじさんのような人が、県有林へ、間伐やりじゃあっちゅう（言って）、ついて行ったんだ。ほいで、行ったら、こうやって切れとも、ああやって切れとも教えてくれなんだ。切るとこ見とって、ほれから、やりだしてのう。ほかの人たちが間伐をやっているのを見て、自分も同じように。

十七の終いに、東大見で、おれと一学年級上と三学年級上の三人で仕事を始めて、山の仕事を覚えた。わしには、師匠もなきにゃ、親方もないだ。人の仕事見て倣う。見て、「あっ、あの人、ああゆうやり方しとる」、「あっ、この人はこういうやり方しとる、おれもやってみる」って。「あっ、これはこの方が早いわ」とか、「こいつの方がきれいにいくか」とか、それを見つけるだ。人のやっている仕事を見て、まねして。ほいで、六十五年、山やってきた。木を切ったり、立っている木の皮を剥いだりのう。ほいから、「シラ」出しやったり、「架線（かせん）」って線を張っといて飛ばかしたり、そういうことをやっとっただあ。

ワイヤーと滑車での木出し・「架線（かせん）」

「架線（かせん）」は、ワイヤーを張って、ワイヤーで木を縛って、ぶら下げて、飛ばかすだ。「カセン」は、線を張ってこうやってやるだぞって、本職の人に教えてもらった。線を張っておいて、そこへ木を持ってって、木をロープで縛ってなあ、滑車で下ろす。ほうして、後ろをパーンって蹴りやっと、チューっと走り出す。ほいで、ブレーキは、滑車につけてあるワイヤー一本。

「架線（かせん）」は儲かるぞっちうて、ずうっとやった。ほいで、連れが若い三人だったんでなあ、「あの衆に頼めば、早いことしてくれる。」って、よその材木屋、みんな頼みに来るだ。

木を並べての木出し・「シラ（修羅）」出し

「シラ」出しって、木を並べてつなげて、その上に水をうっといて、木を落としてのう。これを「シラ」っちゅうだな。

やっぱし、「シラ」には「シラ」のこつがあるでな。ずっと勾配を見てね、木が横に飛び出さんように、木をでぇって張ってくるだ。上がぐっぐっと押さえて、中へ締まるように組んで、真ん中へ三本逆木を使わにゃならん。真っ直ぐばっかじゃない、カーブせんとダメじゃ。横からこう締めて、勾配を生まにゃならんしの。急すぎると、これがこっち飛んじゃうとか、載って上がっちゃうとか。飛びすぎるとか。ちょっと勾配があると、ちょっと「ハナ」をあげる。段差つけるだな。ほうすっと、長く落ちるから、こてって静かに行く。飛ばかした木が、コトコトコトコトと同（おんな）しとこ走っていくように、木を並べんならんだ。ほれが難しいよ。

ほいで、平らばっかだったら、今度は「川」据えてのう。ほうしてから、今度は「シラ」の頭上げて。ほんで、「川」へ木が浮かしてあるだよ、水を高くしておいて。ほいで「シラ」の頭へ水が流れんようにしておく。ほうすると、勾配がつくんで（木が下に）流れていくだら。また、勾配がのうなると、また水入れちゃあ、流して。ほいつを八回ひっくら返って、三人で、竹の柄の小さいトビ（竹トビ）一丁で、二百五十石（約七十立方メートル、一石＝一尺（〇・三〇三メートル）×一尺×十尺＝約〇・二七八立方メートル、木材の量を計る

単位）出したのう。「シラ」がはれる人は少ないよ。うん。だいたい、「シラ」の上歩けん人があるわ。

ソリでの木出し・「木馬（キンマ）」引き

ほれから、「木馬（キンマ）」引き。あいつもやったがのう。木の馬ってかいて、「きんま」っていう。「盤木（バンギ）」って、一尺二寸（約三十六センチメートル）の木を横に打って、そいつの上をソリが通るだな。ほいで、ソリがよう滑るように、油を塗るだよ。木のソリの裏へ「ハグジ」って、樫の木の堅いやつが打ってあるだ。よう滑るように油ひいといてのう。その上に、材木を積んでのう、引っ張ってくるだ。四杯引いてくると、一車（五トン車）ありよった。

「木馬（キンマ）」引きもなかなか難しいでのう。桟橋かけるっちうは、ちょうど梯子（はしご）のようにあって、ほいつの上をそりひいていくだもんでな。ソリが自然に曲がるように道を作って。ほいで、自分にこうやって、一尺二寸の幅のとこに立って、かじ棒持って、自分の背より高く積んで行くだってね。油がつけてあるで、足が滑るんでな、ほりゃ気持ちわりいぜ。高いとこは、川の上、十メートルくらいの高さのとこを引いたことがあるがなあ。（桟橋を）一段やって、（足りないので）また一段やって、その上にまんだ付いて。川の真ん中、えらい高いぞ、梯子（はしご）のような道が作ってあるとこ、通るだんでのう。

牛での木出し

三～四年ぐらい三人でやって、別れてのう。ほいから、牛を引きやっただあ。牛で山の木出しよ。人間の日当が五百円の時に、牛引きをすると千五百円もらえた。三人分もらえるで。「いつまでも家におれんで、仕事探さないかん」と思って、ほいで始めてのう。

二十一歳の七月に牛を初めて買っただ。まんだ仕事をしとらん、田んぼをうつ、しりたたけの牛だっただ。

ほの時に、年をくった人が、「おまえ、これから牛を引くだけえ？」って、「ああ、ちいとやってみん（みょう）と思う」って言ってら、「あのなあ、牛と話ができるようにならにゃあ、一人前の仕事はできんぞ」って言われただ。わしは、それがわからなんだ。ほいつが分かったのがなあ、四年目だった。四年経って、その言われたこと初めて分かった。「あっ、あの人の言われたやつは、このことだ、牛と話はできるわ」と思った。ほんな話をすると、とんでもないことを言うと思われるしらんがね。

時代の変化と牛方引退

ほいで、牛を二十八年使ったがね。牛方でずうっと続いて忙しゅうやっとったやつが、仕事がなくなったんだ。だからまあ、これはあきらめなきゃあかんと思って。牛がのうなったら、こんだあ、木切りでもなんでもやれるでいいやと思って。

木切りと木出しの職人

木切りっちゅうものはのう、みな昔は、「杣（そま）サ」っちゅったものな。ほれからそのうちには、「木切りサ」だってな、ほれから、今の言葉だと「伐採師」っちゅうだな。わしはなんでもない。木を切っても、何やっても、「杣サ」でもない、「伐採師」でもない、「木切りサ」でもない。なんだちゅったら、「職人」でいこうと。

ほいで、山によっても、伐採でも何でも、職人なら、きちんと切らないかんて。「傾げて切っちゃいかん」、「曲がり入れて切っちゃいかん」、「この木は、何の用材に切っとかないかん」とかな、そういうこと見て切らないかん。昔、岡崎の製材屋に行って、「木を切ったで買ってくれへんか」って言ったら、木を見て、「なんちゅうまいこと切ったるじゃんね」。「なんだいかんだか」って言うてやったら。「ほうじゃない、木が見て切ったるじゃ。柱とる木は、余分な太さの木を切ってないと、垂木なら、垂木でも、きちんと切ってある」と。

木をよく見て、採れる寸面で、間に合う材を切ってかないかん。ほうせんと、木をえらい無駄にしちゃう。せっかく何十年も育った木がのう、おれがあかんようにしたら、職人じゃないと。わしはそういう頭なの。

「ちいと分かった」木の根切り

木の根切りは難しいのう。立っとるやつをすとんと切れば転がるに決まっとるじゃ。ただ、ほいつが難しいだのう。六十五年やったが、ちいと分かったとこ。ほんとまだ分からん。

まっすぐ立っとる木はないでのう。大概傾いどるでのう。傾いどる木の重心はどこにあるかっちゅうことをみなダメだ。それを考えながら、どこに切り込みを入れるかという。受け口を切っても、受け口の切りよう。残すところをどの角度で残したら、うまくいくか考えないかん。

いやあ、木切りは難しいな。おら、伐採屋でもない、木切りでもない、何とかして、木切り職人になりたいなあと思ったが、なれん。「木切りと、木出しの職人、にならあ」と思って。なれなんだ。情けない話だ。

山仕事中にちょっと一息

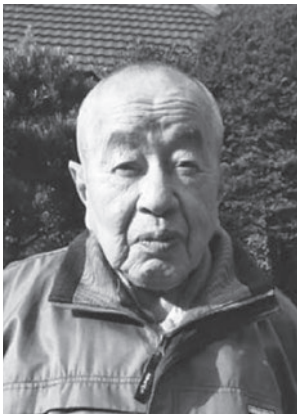
一番ありがたい「ご苦労さん」の言葉

ほいでも、ケガせんでな、やれただけでありがたい。山で仕事して、終わった時に、材木屋さんでも、仕事の人でもだけどな、「ご苦労さんだった」と言ってもらえる言葉が一番ありがたい。

【聞き手・齋藤貴之（東海市）】

今のところ九十七歳　兵隊と教師とお坊さんを生きて

本多　秀山さん（月原町）　大正七年一月二十八日生れ（九十七歳）



お寺の跡取りとして生を受ける

明誓寺ちゅうだ。山号は白水山。わしが二十四世だね。

わしが長男で一番兄貴。母親は一人娘だったね。親父は養子だあ。豊田市の樹木町にある陽龍寺という大きなお寺からね。あの時分は無制限だもん、十二人生んだけども死産が多かった。現在は五人生きとる。大家族だわな。ほんだで、大変だったわね。

お経は、小学校のときにだいぶ早よおじいさんに習った。弟が大勢あってもね、お寺の得度を受けたのはわしひとり、どうしてだかわからんけどもね。小学校の六年生んとき、おじいさんと本山行ってね。髪剃って、本山のご門跡が来て、頭をすぅーってやってね。

中学生時代

ほいから、中学行ったよ。名古屋の尾張中学ちゅうて、今の名古屋大谷高校だかね、真宗専門学校が隣にあってね。お寺の学校だわね。跡継ぎするお寺の子どもほとんどほの中学行ったで。お寺の子どもが半分以上おったわね。本願寺はお坊さんの修業やらんもんでね。中学には本科と別科ちゅうやつがあってね、みんなより一時間早よ行ったり、遅う行って、仏教の本を習ただ。五年間別科やると住職なる資格くれちゃう。えらかったけどもね。

明誓寺本堂

就職そして結婚

わし、中学を昭和十年に卒業して、一年他の学校行っとった。愛知国学院ちゅう神さんの学校。そこも先生の免状くれたもんでね。行っとったけども一年で辞めちゃった。

家に少しおって昭和十二年の九月ごろから先生やった。はじめ旭村の敷島小学校におって、ほいから、賀茂村へ、今の明和小学校に一年おった。親父が先生やっとっただわ、大蔵小学校の大河原分校の主任をね。若いときから。ずーと辞めるまでやっとった。で、名簿を出して県のひとに頼んどいたもん、次にどこへ行くかしらんと思っとったら、親父のおった分校の先生になっとった。分校だもんで、先生は三人しかおりゃへん。主任でも五・六年教えとって、女の先生が一・二年教えとって。わしが三・四年教えて。

結婚は、親がなんしょ早く決めちゃっただね。わしが二十歳。悦子は十八歳で来てくれた。兵隊に出るときだったね。うちの檀家からもらった。悦子の親も寺の世話方やっとったもんでね、わしんとこ毎日来とって、話しとるうちに「お前の娘もらうで来てくれ」ちゅって親同士で相談して。

豊橋第十八連隊と長男の死

わしが召集を受けたのは、昭和十四年の十一月七日。赤紙が来た、召集令状がね。支那事変が始まっとったわね。赤紙が来て入るまでに三日しかあらへん。親戚や親族が寄ってお別れをして、お宮で「行ってきまーす」ちゅって挨拶してね。みんなが「万歳」してね。

ほいで、豊橋の歩兵第十八連隊第四中隊に入隊。ここに入隊したひとは六十人くらい。わしは若い方だったけど、まっと年のひともだいぶおった。高師原ちゅう野原がずーとあってね。軽機ちゅって、軽機関銃撃つ班に入って、三か月練習してね。

ほんだら、家から電報が来て、「子どもが死んだで葬式やる」ちゅう。ちょうど運が悪くてね。悦子の実家が火事になっちゃってね。お蚕飼っとって、火を蚕の下に当てとって、壁が燃えちゃってね。そこへ生まれたばかりの長男を抱いて連れて行ったもんで、煙を吸って急性肺炎になっちゃった。ほいで死んじゃった。中隊長が「葬式だけ、お前、行って来い」ちったもんでね。葬式だけやって、顔をちょっと見たけど、全然覚えない。写真はないだわ。戦争中だったもんでね。ひと月で死んじゃったもんで、運が悪かったわね。かわいそうだった。

中国では司令部暗号班

昭和十五年三月、中国の中支派遣第十八連隊第五中隊に入隊しただ。上海から船で揚子江上って漢口に上陸。日本が取っとったもんだいね。漢口に最初はおったわね。

檀家に沖縄で中隊長やっとって戦死したひとがね、ちょうどほのとき小隊長やってみえて、「本多、今から師団指令部へ試験に受けに行け」って言われたもんだいね。応山ちゅうとこに第三師団の司令部があって、行ったら、師団司令部の参謀部暗号班のひとが四、五人来とった。試験受けたら合格して、「みんな中隊帰るか、司令部へ来るか」って言うから、

みな司令部の方が楽だもんで「司令部お願いしまーす」って。

ほいから暗号ばっか。暗号班って言っちゃいかんもんで電報班と言っとって、数字を足したり、寄せたり。数字ばっかりだ。戦争のないときは、乱数表ちゅうやつがあってね。ほいで足しちゃうだ。ほいつを打つと、向こうで引き算で引いてやると本文が出てくるわね。その練習ばかしやっとったんよ。戦争となると、なんしょ机と腰掛け集めてね、電気がないからだあーと蝋燭立てて。

二度目の出征は台湾

昭和十七年の三月に帰って来て、わしゃ先生やっとったもんで、また、大河原分校へ行っとっただ。

二回目の召集は、昭和十九年の八月九日です。台湾におってね。ほんとはフィリピンへ行くだったけども。台湾の高雄ちゅう一番はずれのところに輸送船が三隻おってね。毎日アメリカの空襲が「だだだー」。船がみな燃えちゃった。みんなが「あ、船が燃えたでまあ行かんでもええぞー」ちっとったら、軍司令官の命令で「今おる部隊、全部台湾軍に編入」ちゅう。「ばんざーい」だわ。あんなん船で行ったら絶対途中でやられちゃうでね。フィリピンに行かんうちに海の藻屑になっちゃう。

昭和二十一年の三月に帰ってきた。帰る時分には帰る準備ばっかだ。「まあ、命令来んかなー」ちっちゃ。中国本土におったひとなんかは使役に使われちゃうわね。わしは、よかったよ。乾パンでも何でも砂糖で晩飯。ほいだで、帰るときにゃいっぱい砂糖持ってきた。シャツも新しいのをもらってくる。ズボンもやわらかな兵隊のやつを二つくらい持ってくる。背負えんぐらいだ。

今は昔、御内小学校の思い出

大蔵で昭和二十九年まで先生やっとってね、ほいから、御内。ほこの校長は、わしの親父と昔、ほりゃ仲が良かったもんだい。「お前、御内に来い、呑気だでええで来い、来い」って。御内なんかえらい山の中だもんだいね。しょうがないで四年おったけどね。通う訳に行かんから学校の際に住宅があった。校長住宅も先生の住宅も全部作ったってね。みんな奥さんもらったひとばっかだもんだい。

子ども少ないしね。複式だもんだいね。一・二年、三・四年、五・六年。わしゃ五・六年教えとったけどね。先生は四人。中学校の分校もあった。二年下だったけどもね、分校の先生がひとりおってね。生徒は四十何人おった。県有林と郡有林ちゅう山があってね。県有林の事務所や住宅があって、戦争中に名古屋の方から疎開したひとはそこで働いとってね。山の木を切っちゃおった。生徒がそこから山を越えちゃ通っとった。ほいで雪が降る。今と違ってものすごい雪がよう降ったもんでね。山道から落ちちゃうであぶない。雪が降ると三日間休めるちゅうことになっとった。今のように電話はないもんでね。雪が降ると麻雀さ。子どもが来んで朝からやる（笑）。

教職四十年、住職五十年

ほれから大見小学校に行って、御蔵小学校。御蔵から萩野か。萩野から新盛。終いには小渡小学校に一年行ってね。

五十七歳の定年のあと、養護学校の講師の募集しとったもんで、岡崎の養護学校に四年おって、ほいから、三好養護学校に四年。名前は講師だけんどもね、学校行けんで家で勉強しとる子どもの家へ行ってやるだけど、勉強なんほとんどせんもんで。車椅子にのせて散歩して歩いて、お母さんとしゃべって来るだけで済んじゃう。一日二軒。ほいで、一週間に一回、本校へ行く。岡崎行ったり、三好の学校へ行ったり。六十五歳まで使ってくれた。

わしの親父はね、わしが四十歳のときに死んじゃった。ほんときにゃ、わしは、御蔵の先生だったけど、定年までやらにゃいかんもんね。年金もらわにゃいかん。

葬式あるとほんと困っちゃうわね。朝から行かにゃしょうがないもん。法事は日曜にやりゃあいいけど。校長さんや他の先生に「お願いしまーす」ちゅっちゃ頭下げて行かんならんもん。ちょっとつらかったね。そんなに休むと、今だとクビになっちゃいよった。

ほいでも、お寺の住職は四十歳から九十歳まで五十年間やったもんでね。本山で管長から表彰してくれた。本山で記念写真撮って。全国でも五十人ぐらい。愛知県で四人ぐらいしかなかった。記念の袈裟をもらったよ。

いまどきのお寺事情もあるけれど

わしんとこの孫は女ばっかだ。で、一番上の孫が恋愛結婚で養子もらったけども、跡やってもらわにゃいかんもんだいね。トヨタ自動車の本社に通っとるわけだが、岡崎の真宗学院へ三年間、夜、講習行ってね、免許取っただ。

孫もね大谷大学行ったもんね。女でも住職の資格取っとる。長男の嫁も試験受けて資格取った。みんな住職の資格取ったね。わしと息子夫婦と孫夫婦と、みな資格取ったね。ほんだで、その点は安気だよ。ほいで、三人曾孫があるもんで。はい、小学四年生と二年生と子ども園行っとるのが四つか。ありがたいね。

戦争中に亡くなった戦友たちに、もう戦争がない平和な国が続くように祈っとります。

【聞き手・小林　誠（則定町）】

足助の聞き書き　朗読集　第五集　ダイジェスト版

発行日　令和六年三月
発行　あすけ聞き書き隊
mail：kgt@asuke.org
web：http://kgt.asuke.org

朗読　葵　真弓（ラジオ・ラブィート　パーソナリティ）
録音・編集　小笠原禎志（ラジオ・ラブィート　ディレクター）
協力　エフエムとよた株式会社
印刷・製本　三河印刷株式会社

＊この本は、令和五年度足助地区わくわく事業補助金を活用して製作したものです。